

幸田弘子の舞台朗読

名作の世界を堪能する



昨年好評を博した

「幸田弘子の舞台朗読」シリーズの第二弾。

今回は千年紀で注目の「源氏物語」から

夢幻の世界を感じさせる内田百閒まで

ジャンルの異なる名作の世界を

三回のシリーズでお楽しみください。

第4回

2008年10月25日[土]

内田百閒作『花火』『豹』『蜻蛉玉』ほか

○ジャズフルート演奏・奥泉光(芥川賞作家)

紫式部作『源氏物語』より「葵」

○構成・三田村雅子(フェリス女学院大学教授)

○現代文ナレーション・鈴木千秋

予告

第5回 2008年11月29日[土]

宮沢賢治作『よだかの星』

樋口一葉作『にごりえ』

第6回 2009年1月31日[土]

松尾芭蕉作『おくのほそ道』

○音楽・宇野信夫

◎かつしかシンフォニーヒルズ・アイリスホール

◎各回とも14:00開場 14:30開演

◎入場料(全席自由) 一般 2,800円 会員 2,500円
全3回通し券 一般 7,000円 会員 6,300円

◎チケットお取り扱い 前売り開始 / 7月8日[火]

● かつしかシンフォニーヒルズ・チケットセンター 03-5670-2233

● かめありリリオホール・チケットセンター 03-5680-3333

● 葛飾区文化施設指定管理者ホームページ <http://www.k-mil.gr.jp>

● 電子チケットぴあ <http://pia.jp/t> 0570-02-9990(オペレータ対応) ● e+(イープラス) <http://eplus.jp/>

2008年 10月25日[土]

幸田弘子の舞台朗読

名作の世界を堪能する

◆内田百閒 作『花火』『豹』『蜻蛉玉』ほか

岡山の造り酒屋の一人息子として誕生した内田百閒(明治22年〜昭和46年)は、夏目漱石門下の小説家、随筆家で、迫り来る得体の知れない恐怖感を表現した小説や、独特なユーモアに富んだ随筆などを得意としました。

今回朗読する『花火』『豹』『蜻蛉玉』も、夢とも現ともつかない不思議な世界を描いた作品です。それぞれとても短い作品ですが、えも言われぬ世界を、芥川賞作家・奥泉光氏のジャズフルートとの競演でお楽しみください。

◆紫式部 作『源氏物語』より「葵」

今年、紫式部が『源氏物語』を著してちょうど千年にあたりとされ、「源氏物語千年紀」として源氏ブームが巻き起こっています。

今回取り上げる「葵」は、葵の上、六条御息所、紫の上という3人の女君が、光源氏と関わることで大きく人生を転換させていき、物語がダイナミックに動き始めていく巻といえます。

『源氏物語』は原文で味わってこそ作品の魅力も深まります。今回は源氏学者として活躍されている三田村雅子先生の構成で、原文を中心としながら現代文のナレーションも交えてお聞きいただきます。



東京生れ。NHK東京放送劇団に入り、放送・舞台で活躍。主演した三善晃作曲、音楽詩劇「オンディーヌ」は文部大臣賞、イタリア賞大賞を受賞。舞台で古典から現代文学作品までの朗読を続け、1977年から毎年「幸田弘子の会」を開催、樋口一葉を中心に、『源氏物語』や泉鏡花・森鷗外・夏目漱石・瀬戸内寂聴の作品など、古典から現代まで舞台上で朗読。舞台朗読という新しい分野を確立した功績に対し、81・82・84年と続けて芸術祭優秀賞受賞。さらに84年度芸術選奨文部大臣賞、95年毎日芸術賞、96年紫綬褒章、02年藤村記念歴程賞受賞。99年より『源氏物語』、『おくのほそ道』などによる「古典を読む」会の連続公演も開始している。01年から「源氏語り五十四帖」と題して『源氏物語』の原文を、彩の国さいたま芸術劇場(年6回・9年間)で読み始めている。03年秋の叙勲において旭日小綬章を受章。

場(年6回・9年間)で読み始めている。03年秋の叙勲において旭日小綬章を受章。

2008年 11月29日[土]

宮沢賢治 作『よだかの星』

岩手県の質・古着商の家の長男として誕生した宮沢賢治(明治29〜昭和8年)は、今でもたいへん人気のある作家ですが、生前に発表された作品はごくわずかで、死後になって多くの作品が刊行されています。

『よだかの星』も死後に発表された作品のひとつです。はちすずめやかかわせみの兄でありながら、醜さゆえに鳥の仲間から嫌われ、鷹からも改名を強要されるよだか。彼はついに生きることに絶望し、太陽や星にその願いを叶えてもらおうとしますが、相手にされません。夜空を飛び続けたよだかが最後に決意したことは――。

樋口一葉 作『にごりえ』

樋口一葉(明治5〜29年)は「奇跡の14カ月」と言われる時期に、『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』などの名作を次々と発表した、明治を代表する女流作家で、幸田弘子がライフワークとして読み続けている作家でもあります。

『にごりえ』は、明治28年9月、23歳の時に発表した作品で、盂蘭盆会の頃、銘酒屋「菊の井」の一番看板であるお力を中心として物語は展開します。馴染みの源七と別れた後、お力には結城朝之介という新しい馴染みができたものの、内面の鬱屈は解消しません。何処にも逃げ場のない『にごりえ』の世界。それぞれの苦しい生きざまと悲哀は、聞く者に切々と迫ってくるようです。

2009年 1月31日[土]

松尾芭蕉 作『おくのほそ道』

『おくのほそ道』は、松尾芭蕉が元禄時代に著した紀行本で、日本の古典における紀行作品の代表的存在で、松尾芭蕉の著書の中でも最も有名な作品と言えます。

芭蕉が弟子の河合曾良を伴って、元禄2年3月27日に江戸深川の庵を出発し、全行程約600里(2400キロメートル)、日数約150日間に東北・北陸を巡って元禄4年に江戸に帰ったときの紀行作品で、『おくのほそ道』では、旧暦8月21日頃大垣に到着するまでが書かれています。

◎かつしかシンフォニーヒルズ

〒124-0012 東京都葛飾区立石6丁目33番1号

- 電車:京成本線京成上野から約18分、または都営浅草線(京成線直通)日本橋から約20分、京成青砥駅下車徒歩5分、または京成立石駅下車徒歩7分
- 京成バス: JR新小岩駅⇔JR亀有駅(新小53)「文化会館」下車

